

平成20年度第5回三重県教育改革推進会議【議事録兼概要】

I 日時 平成20年10月17日（金） 13:00～15:30

II 場所 プラザ洞津「孔雀の間」

III 出席者 【委員】井上 邦子、上島 和久、大西 かおり、加藤 正彦、木本 博文、佐伯 富樹、田尾 友児、中野 義則、中村 武志、中村 真子、西田 寿美、向井 弘光、森本 敏子、山北 哲、山田 康彦
【事務局】向井 正治、鎌田 敏明、松坂 浩史、平野 正人生、増田 元彦、山口 千代己、鈴木 繁美、土肥 稔治、中谷 文弘、森下 宏也、丹羽 毅、北原 まり子、中原 博、安田 政与志

以上30名敬称略

IV 内容

1 挨拶

前回の推進会議では、国の教育振興基本計画と県の教育振興ビジョンを説明させていただき、今までのこの会議での議論を基にして、今後の三重県の教育のありかたや課題について議論いただいた。今後の三重県の教育を考えていくにあたっては、三重らしさというものも出していきたい。国の教育振興基本計画はあくまでも参酌するものであり、各地域の特性に応じた、地域らしさを発揮していくということが重要と思っている。三重県らしく、本当に子どもたちのためになる教育のあり方を考えていく必要があると考えている。平成23年度以降の教育ビジョンについて、今後策定を進めていくにあたり、内容や策定方法も含め、議論を深めていただければと思っている。

学力学習状況調査の公表については、決して好ましいものだとは思っていない。学力テストが競争の材料や、批判の対象になるような使われ方をしたのでは、もともとの考え方がないがしろにされていると思っている。あくまで子どもたちの状況を測り、子どもたちのことを考えながら、参考資料としていくことが大事だと思っている。全体として学力を向上させながら、日本が国際社会の中でも力をもっていく、そういった人材を輩出していくためにも基本的な学力の保障は必要であり、それに加え地域での特性を活かすことが、議論の一番根底にあると思っている。

本日は、今年3月に改定された学習指導要領の中で、引き続き基本的な理念となっている「生きる力」に焦点を当て、広い視野から皆様方にご意見をいただければと思っている。「生きる力」を育成していくために、今後の三重県の教育に何が必要か、そういったご意見をいただきたいと思っている。本日はよろしく願いいたします。

2 報告事項

第4回三重県教育改革推進会議の概要報告について

…資料1・2に基づき、中谷教育改革室長から説明

資料1は前回の議事録概要であるが、従来より詳しい議事録になっているので、確認いただきたい。資料2は、前回の主な意見抜粋であるので、確認という事をお願いしたい。

3 審議事項

(1) 生きる力について

新しい学習指導要領 小・中学校学習指導要領等改訂について（抜粋）

生きる力 学習指導要領がかわります

…資料3・4に基づき、松坂総括室長から説明

資料3は、学習指導要領の改正の経緯と基本的な考え方を示している。現行学習指導要領下では、「生きる力」の意味や必要性について趣旨の徹底が十分ではなかったため、共通理解がなかった。自主性を尊重するあまりに指導を躊躇する状況があった。総合的な学習の時間での課題解決的な学習や探求活動との間の段階的なつながりが乏しくなっている。授業時間が少ない。地域の教育力が低下していることを踏まえていない。などの課題が指摘され、「生きる力」が引き続き重要であること、知識・技能と応用力育成のバランス、道徳や体育などの充実を、基本的な考えとして挙げている。

資料4は、学習指導要領改正の中で特に大きく取り上げられている「生きる力」に関して、知・徳・体のバランスのとれた力と説明している。改正のポイントとして、教育基本法の改正等で明確になった教育理念を踏まえて見直しをしたとある。基礎的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力の両方が大切であることを、改めて強調している。

教育改革推進会議・部会での「生きる力」に関する意見抜粋

…資料5に基づき、中谷教育改革室長から説明

確かな学力関係では意見が多く、学習意欲の問題について意見交換された。豊かな人間性の部分では、確かな倫理観と実践力の育成が求められるという意見があった。体力の低下や心の問題についても意見が出され、心を育てていく教育の推進や、社会性育成のためコミュニケーション力をつける必要がある、といった意見があった。その他「幼児期からの一貫した教育の推進」や「特別なニーズに対応した教育」についても、意見をいただいた。

《以下意見交換》

【委員】

ここで今回議論されたことが、どういう形で今後活かされていくのか、教えていただきたい。

【事務局】

今後ビジョン策定にあたって、「生きる力」というのは大きなテーマであろうと考えている。ここでいただいた意見をそれにつなげていきたいと思っているが、具体的な手順やメンバーについては、まだ詰めていない。今の委員のメンバーの中で「生きる力」についてある程度まとまったものを出していただければと思う。

【委員】

「生きる力」については、国は資料4のような保護者宛ての冊子を作り配ったが、あまりにも総花で、焦点が絞りにくい。学校現場や家庭・地域で、実際にこれをどうやっていくのかということ、明確にポイントを絞って示していかないといけないと思う。名張市においては、昨年度から学力調査検討委員会を立ち上げ、明確な現状の把握と今後への展望、視点をはっきりとしていこうと考えている。その中で、「確かな学力」や「生きる力」をよく分かるようにしていき、子どもの現状を踏まえた中で何が必要で、何が欠けており、どうしていこうかということ、教育委員会としてより多くの方の意見を聞きながら、方向付けをしていかないと、市民にそれがはっきりと見えていかない。何よりも学校現場で、先生方がしっかりと意識を持って取り組むことが、非常に大事ではないかと思っている。「生きる力」をどう明確に捉え、実践していくかということが一番大事なことではないかと思っている。そのためには、学校現場に必要なこと、それぞれの教育力を捉えた上で、家庭や地域に必要なこと、あるいは関係の学校、機関等と連携していくということが大事ではないかと思っている。

【委員】

昔の地域社会では、学校と地域のいろいろな人が連携して「生きる力」をつけ、子どもたちを立派な人間に育て、社会に出す体制ができていたと思うが、最近は地域社会の崩壊や都市化の影響で、そういう部分が弱くなっていると思う。今回の学習指導要領の改訂で、規範意識や他人を思いやる心、伝統や文化に関する教育といった部分も学校教育の中に重点的に含まれてくるようになったのは、地域において子どもたちを社会に出す力が弱まってきたためではないかと思っている。昔は学校で読み、書き、そろばんの力をつけてもらうのが、大変重要だという意識があった。逆にそれ以上のことは、あまり学校には望まず、家庭や地域でその他のところは教育してもらう、して当然という体制があった。その部分が欠けているのが、今すごく問題だと思っている。地域や自然の中で子どもたちが能力を伸ばす、ということが多くあると思うが、そういうことを学校教育に積極的に取り入れたり、生涯教育や社会教育などと連携したりして、「生きる力」を総合的に伸ばす機会を提供してはどうかと思っている。

【委員】

ゆとり教育で、国際的に見ても学力が落ちてきたが、地域差もできたと思う。小学生、中学生から一貫教育、私立校にやれるような経済力の高い地域、選択権が沢山ある地域と、地方の非常に選択権の少ないところで、差が出てくる。また収入の格差がここ10年非常についてきて、ますます教育にかける金、かけられる金が違ってきたと思う。一概に「生きる力」はどうすればいいかと言っても、状況はものすごく違うと思う。学力・学習状況調査の公表の件も、本当に学力をつけるために利用するという意思が、どこまで働くかということによって、公表していいかどうか決まると思う。学校間のランキングを決めるだけであれば、いい生徒、頭のいい子がいい学校へ行く、いい地域へ行くということになってしまうが、教育に対する金のかけ方の費用対効果も出しやすくなるし、公表しないと利用する値打ちが減ってくる。学力に関してもなかなか一つにして考えにくい。総合的な学習で、幼稚園や保育所へ参加させて教育効果を実験するような、目覚ましい取組をしているところもあるが、総合学習を減らすとなるとそれも難しくなる。問題は、教育にどれだけ金をかけるかである。それも都会と地方とでは全然考え方が違い、置かれている構造が違う。三重県独自の費用対効果を出して投資をしないと、生徒の「生きる力」も出ないのではないかと。日本は世界の先進国の中で、医療と教育に今一番金の投資をしない国である。そういう状況で「生きる力」をつけよ、と言っても難しい。空論にならないための議論が必要だと思う。

【委員】

昨年特別支援教育部会で学校訪問をし、心身に障がいのある方と実際触れ合い、自分の中で大きなショックを受けた。ご両親等と一緒に、必死になって生きていると感じられた。道徳教育、その中の人権教育、弱者の方を慮る教育を実践していくことによって、「生きる力」になっていくのではないかと。ちょっとしたことで自分の命を断ってしまうような学生がいる中、真摯に生きている方が見えるということ、実際目に触れ、理解することによって意識が変わっていくのではないかと。「生きる力」とはそういうことではないかと感じている。

【委員】

「生きる力」は、考え方の幅が広いと思う。資料4の冊子は、保護者の方に配られたという話であったが、どのように説明し、理解してもらうような措置をどのようにしているかが問題だと思う。ただ配っただけでは、殆どの親は目を通すだけで中身を理解しようとしなないと思う。子どもたちは喧嘩をしたり辛いことがあったりしても、ある程度見守って、自分たちで解決する力を身につけさせることが大事であるが、今の親は家庭での躾とか、社会では通用しないということを教育せず、すぐに学校や子どもの友達に対して文句を言うなどして、親が解決してしまう。子どもが成長しにくい環境ができてしまったのではないかと。こういう立派な物が作られたので、学校や家庭、地域にこの内容を知らせ、うまく活用できる方法はないのかと思う。

【委員】

問題はやはり、「生きる力」という言葉では非常に分かりにくいことである。私自身は、人間が人間らしく生きる能力なり資質と考えている。基本的な能力としてはいろいろな子がいるが、良くなりたいという気持ちを持ち、いろいろな場面で頑張っているのは確かである。学級の中でそれぞれの子がうまく認められている場合、その学級での授業は教師としてはやりやすいし、子どもたち一人ひとりがよく考える。人間関係がうまくいけば、いろいろな意味でかなり伸びる。それぞれの子どもが帰属意識なり、自分が認められているというような意識を持てば、非常に能力を発揮していく。逆に自分の存在感が認められない場合、そこから逃げようとする。まず、それぞれの子どもが認められる場を作る、そこからスタートしていくのではないかと思う。

【委員】

課題集中校、荒れている学校で、総合的な学習の時間が導入された。地域の産業体験をさせようか、地域の人たちとの中で何か見出せないかと考える中で、子どもたちにいろいろな課題はあるけれど、一生懸命労働に励む姿や、おじいちゃんおばあちゃんから根気よく話を聞いていく姿勢から、子どものいい面を見出してもらい、学校の教育活動への理解が深まった事例がある。

大きな課題はないけれど、覇気がない、やる気がない子どもたちに自然体験をさせ、いろいろな驚き、困難、発見の中で、子どもたちが変わっていったという事例がある。海の子であるが、山の中でその山を守るのに一生懸命頑張っている人達の姿を見て、海でも頑張らなくてはいけないと思い、自らの生き方を変えていこうとしている子どもたちもいる。

学校に来にくい子がいるクラスの子どもたちが、学級担任に「先生、一生懸命やっているのか」「あの子いなくてもいいのか」と問いかけをしながら、「先生、あの子のところへ誘いに行こう」という思いを持ちながら、一緒にやっていきたいという子どもたちがいる。

まったく問題はないし、規律も決まりも良く守る子どもたちの学校で、修学旅行や遠足に行くと「整列」と言うと、見事に整列する。ただ駅で整列すると、その列の最後尾と後ろの壁の間に隙間が無い。結局並んだがために他の一般乗客の邪魔をすることになり、「自ら考えて解決をする」ことは難しいのかと思う、という報告を聞いたことがある。

自分が生きてきた時は、今日よりも明日、明日よりも明後日、良い世の中になると思って生きてきたが、教師になった今、子どもたちにそれを言い切る自信がない。「先生ホント」という視線を感じる時がある、ということをおっしゃる校長先生がいた。

6、7年前に三重県では基礎学力向上検討委員会というものをして、知・徳・体プラス三重県らしさを出そうということで、「ともに生きる」とか、「ともに学ぶ」というところを軸に、教育活動を展開しようではないかと一定の報告書を出したと思う。また検討して欲しい。

【委員】

「生きる力」は、大人が考えても難しい言葉で、幅が広いので、子どもはもっと分からないと思う。「生き生きすること」「生き生きと感じる時」と考えると、子どもにも分かりやすい気がする。資料4の3ページの内容は、読めば理解できるが、このようにするのにどうすればいいのか、家庭では具体的な方策を考えるとと思う。子どもが「生き生きする時」は、何かをやり遂げようとする時、みんなと仲間意識を持ち誰かに認められる時、支えてくれる人がいる時、そういう時満ちた気持ちになると思う。子どもたちがどうすればそういう思いになるかは、ただ一つ、大人、親、学校、親戚、地域のおじさんやおばさんみんなが、子どもを支えて愛するという事しかないと思う。それをしてあげたら子どもたちはすごい力を出してくれる。いつ「生きる力」を出すかはその子自身が決めることで、その満ちた条件を作ってあげるのが大人、親の役割なのかと思う。頑張れ、頑張れと言われても子どもは困ると思うし、そう言って頑張るものでも、頑張れるものでもないと思う。自分自身、今までいろいろな人が関わってくれて、力をもらって、いろんなことを経験して初めてここにいる。経験でしか、子どもたちは大きくなることはないと思っている。

【委員】

心と体にいろいろな問題を持っている子どもたちを見ていると、共通しているのは、自分がこういう存在でもいいと思っていない、自信がないことである。比べて自信がないのではなく、自分に自信がない。それは周りから評価されてないからであり、いろいろな問題行動を起こし、他の子にとって迷惑になるというレッテルを貼られてしまう。そういう子は、共に何かしてくれる人が出てくると、みんな元気になる。入院して病棟職員が24時間ともに何かをしようと働きかけると、段々子どもたちはやる気を持つようになり、何か面白いことはないかという気持ちが出てくる。そばにいて、ともに何かをしてくれる大人が、いかに少なかったのかと思う。一番そばにいてのは親だろうと思うが、親御さんもともに考えてくれる人がいない。自分が困った時に助けてくれる人がいないような親御さんほど、子どもに口だけで「やりなさい」と言う。親御さんの問題だけでなく、そばにいて、ともに何かをしてくれる先生に会うと、子どもたちはまた元気になる。元気になると、意欲がわいてくる。「共に」という言葉が、大人にとっても大切なことかと思う。その辺が「生きる力」に繋がると思う。いろいろなことが書いてあるが、それを誰が子どもとやるかが肝心なことだと思う。

【委員】

保育の現場では、子どもが望ましい未来を作る、生きる力の基礎を作ることを日々の目標に、取り組んでいる。いろいろな人との関わりの中で様々な体験、実践を通して、人を愛したり、信頼したり、人権を大切にしたりしながら、自主性や自立すること、生きていく力を身につけさせたいと思っている。そのために、子どもたちを援助していく事が大切である。自分たちは人的環境として、いつも子どもにとってモデルであり、お手本でありたいと思っている。保育所でも職員が豊かな人間性で、倫理観をもって子どもたちに対応しないと、響いていかない。きめ細かな教育の推進として、いろいろなことができるようになる以前に、人間としての教育を、一人ひとりの子どもたちに丁寧にあげたい。

【委員】

子どもたちが学校で生活したり、社会に出て行ったりする中では、様々な人たちとよりよい関係を作っていくながら、生きていかなければならない。そういうことを考えていくと「共に生きる力」「生き合う力」、そういう力は「生きる力」の中でも大事な一面になると思う。自分が身に付けた知識や技能を、それぞれの場で自分の言葉で相手に分かりやすく伝えていく能力は、共に生きていく、生き合う中で、基本になることだと思う。そういう力を学校現場でどうつけていくかと言うと、知識理解の詰め込みばかりではなく、考える力、判断する力、資料からものを見抜く力、分析する力、それをまとめて自分の言葉にして相手に伝える力、それをもとに相手と対話をする力、そういうことに力を入れた授業をどう仕組んでいくか考えていくと、共に生きる力、共に生きあう力に繋がっていくと思う。

【委員】

すべての子どもたちに、きちっとした学力を身に付けるようにすることが、大事なことだと思う。本当に身についた学力、身になる学力、そういうところまで学力が身についていくような教育をしていくことが、大事だと思っている。活用力とか応用力がやはり弱い。覚えた知識がどういう意味があるのか、本当に身についた学力に育てていくことが大事だと思っている。「生きる力」というのは、子どもたちが一人前の大人になる力ではないかと思っている。昔から日本の社会の中では、働く力と社会性との二つから、一人前の大人のイメージが共有されていた。しかし今の学生を見ると、人とコミュニケーションしながらお互いに人間関係を作って何かをやっていくことが得意ではない。もっと小さいときから社会性を育てていくようなことが必要である。子どもを大人にする仕組みが、昔は地域にあったが、今は学校にしかない。高校を卒業するぐらいで、ある程度大人の力が育つことを目指した教育目標を立て、取り組めないかと思う。学校の中でも、子どもたちにどんな力を育てるのかを、より明確にした取り組みができないかと思う。それは、学校評価の問題と繋がっている。総合的な学校の取り組みと、「生きる力」とを繋げた学校づくりができたらと思う。

【委員】

「生きる力」というのは、その人が持っている目標と考えたらいいのではないか。学校教育は、その夢作りを支援し、夢の実現につながる学習意欲を引き出すことが必要ではないかと思う。「生きる力」というのは、その人が目標とするもので、目標を持った人は必ず自分の目標に向けて学んでいく。小学校で「何になりたいか」と聞き、それを企業が支援したりして、幅を広げて話しをしていくのも良いと思う。人が生き生きと働く一つの目標を与えていくのが、学校教育が担う「生きる力」ではないかと思う。企業がそれを引き受けて、日本で、また世界で通用する人間に育てていくことに繋がる。社会と教育が連携していなければいけないと思う。基礎ができ、目標をしっかりと持った「生きる力」のある人たちが誕生すれば、産業界も大いに進化していけると思っている。

【委員】

以前から「生きる力」の連続性が言われている。その中で幼稚園は、生まれて初めての集団生活を通して、子どもたちや先生と出会い、どのように人と関わっていくかを学びながら、社会生活を営んでいく基礎の力を培っていく教育機関である。生きる力の基礎を培った子どもたちを、小学校に上げていくことが、連続性として一貫した教育に繋がると思っている。

【会長】

どうも、ありがとうございました。

先ほどの意見の中で、基礎的な知識とか学力、あるいは確かな学力について、何人かの委員の方が触れられたので、この後の時間は学力について意見をいただければと思う。

【委員】

今度の改革で基礎的学力を学ぶ時間が増えたが、すべての生徒の基礎的学力をアップさせることにその勢力を使うことだけで、果たして子どもの「生きる力」が蓄えられるのかも、一緒に考えていかなければならないと思う。英語を学ぶことが、果たして基礎的学力に値するのだろうか。アンケートで見ると、今の日本の子どもは自尊心も低い、向上心もない、親を尊敬する気持ちも社会に溶け込む気持ちも非常に低いような気がして心配である。基礎的学力をつけることも必要であるが、それ以上に学力以外の、「学力を活かせるその他の力」、自尊心とか社会性、社会力といったものがあって初めて将来伸びる。それをどのようにして学習させていくかということも、忘れてはいけないと思う。三重県だけ、小学校や中学校で特別優秀な子を育てるとするのは難しい。将来ヒントを与えたら伸びる子を、育てていただきたいと思う。素養として「夢とロマン」が身につくように、優秀な先生を他県から引き抜いてくるぐらいの姿勢で、一校に一人はスーパー教員がいてもいいのではないかと思う。

【委員】

優秀な人には、基礎的な部分については非常に沢山の知識を持ちながら、ある一点だけを錐のように揉み込んで考えていくという思考方法ができる人がいるが、小学校では、それは危険だと思う。基礎的なところについては、ある程度幅広く、多くの子につけていきたいと考える。ゆっくり考えたらできる、子どもたちの間で少し話をさせたらできるということを、小学校ではしっかりとやっていくべきではないかと思っている。公式を覚えるといった技術は必要であるが、あとは子どもたちがいろいろな形で話をしている中で解決をしていくことができれば、それでいいのではないかと思っている。最初問題を見た時にすべてを考えられるようなレベルを追い求めるのは、無理をしなければいけない部分が出てくるのではないかと思う。

【委員】

学力を考えると、そんなに頭が悪くなったわけではなく、低下したのは意欲だと思う。大きくなればなるほど、学習の意欲をなくした子が多くなっていく。夢を持って勉強をする子はごくわずかで、高校や大学に行くべしということだけで勉強している。一番大切なのは意欲だと思う。思春期でいろいろなことを思っている子は、「生きる力」の前に「生きる意欲」がない。それをどのように育んでもらうか、教育に期待するところである。意欲は、出てこないだけで持っていると思う。誰かがそばに居てくれないと出ない問題ではないか。みんな「寂しい、一人ぼっち」と言いながら、群れをするとへんな所へ行く。そこを何とか考えて欲しいといつも思っている。

【委員】

私も意欲が一番問題だと思っている。ただ子どもたちの様子を見てみると、知的好奇心は結構ある。この前6年生の担任の先生から少し遅れるという連絡が入り、代わりに教室へ行き、クイズを出した。そうしたら、子どもたちの目が輝き出した。本当に考え出す。「隣の子と相談しても良い」と言ったら、ものの1分位で解く子が居る。隣の子と話しながら自分で確信が持てたら「はい、できました」と言う。子どもたちには、知的好奇心というのは結構あると思う。それをどうやって刺激していくか、考えていかなければいけないと思った。

【委員】

潜在能力をすべて出せば、かなり伸びる子どもは沢山いると思う。学校のメンタルヘルスの授業で、心理テストを行い、そのクラスを2年間観察させていただいた。詳細なアンケートを元に、個人対応をしながら様子を見てメンタルを改善したら、不思議なことに成績が上がった。やる気の出ない子、やる気があっても余分なことがあって発揮できない子の、やる気を上げる方法は、無いわけではない。今の限られたスタッフの中でやっていこうと思ったら、いろいろな面から試行錯誤し、かなり知恵を出していかないといけない。

【委員】

地域のお年寄りも、生きる力が高く、学力の重要な3要素も満たしている。食料を自給し、いろいろ創意工夫しながら人生楽しみながら生きている。しかも、円周率や漢字を自在に使いこなす、日本の良い文化を保ち、学力の重要な3つの要素を満たしている。一昔前の日本の教育はすごかったのではないかと思う。社会や家庭の状況が違ってしまったことが大きな問題だと思うが、もう一度そういうところを見れば、学習に取り組む意欲を上げるヒントになるのではないかと感じている。一番元になっているのが、自然の中から自分たちの生活に必要なものを、どのように取り入れるかである。元に戻るような体験が、学力の3つの要素を満たす一つのヒントになるのではないかと思う。

【委員】

人は目的がなかったら、学校での勉強は殆どやらない。目的があったら、それに向けて一生懸命勉強する。「目標や夢を持たないとダメ」と言われているが、それをすべての子に理解してもらうのは、なかなか難しい気がする。全体的な学力のアップは大切であるが、基本という簡単なことでもできる子、まあまあできる子、できない子といろいろな子が居る中で、すべて同じように考えて引っ張っていくのは難しいことである。人権の視点からは、「この子はできない子」と置いておくわけにもいかない。そういう対策を考えていかないと、全体的なレベルアップというのは難しいと思う。

【委員】

小学校の場合、塾に行くことでかなりの差がついている。弁護士や医者になりたいという子どもの文章は、全然違うと感じている。先生は大変な時期に来ている。教育のあり方を、一人ひとりが持っている能力から考えていく必要があるのかと思う。一方で、急に成績が伸びなくなり、離婚した親を刺してしまうというような事件もあり、学力ばかりが先行していいのかと思う。人生と教育とが一致していないといけないと感じる。学校教育のあり方として、塾に行っているとか家庭教師がついていることを、もっと把握しながら指導していく必要があると思う。小学校や高校では、かなり格差がついていると実感した。

【委員】

教育関係者の思いと、一般の方、あるいは保護者の方の思いが一致することは、なかなか難しい。その結果、学校教育に今までと違ったものがいっぱい持ち込まれ、先生も疲弊してきている。家庭・地域を見るといろいろな問題が山積し、子どもの責任ではなく大人の責任ではないかなと思うことも沢山ある。教育というのは、学校教育がすべてではない。生涯学習の一部に学校教育があり、生涯の中の基礎、基本になる、根や幹であると捕らえている。目先のことだけを考えていては、本当に幸せな人生、あるいは「生きる力」が見つからない。学力は、3つの要素がバランスよく身につけていかないと、上手くいかないのではないかなと思う。そのためには、国、県、市町村の教育委員会あるいは学校、教師、親それぞれが、子どもの成長発達ということに関して責任を持って取り組んでいく、そういうムードをみんなで作っていかないと前に進まないと思う。具体的にクリアできる方法を、みんなで知恵を出し合って、十分議論をした上で良いと思うことをまず実践してもらう事が、何より大事ではないかなと思う。その実践は、柔軟な姿勢でやっていくことが、必要ではないかなと思っている。

【委員】

学力を育てるということを考えた時にとても大事なものは、学級が一つのコミュニティになっていたり、学校全体が学びあうような文化を持っている一つのコミュニティになっていたりすることではないかなと思う。子どもたちにとって、一人ひとりの子どもが大切にされ、学びあっていくようなクラスができていくかどうか、学校がそういう雰囲気を持っているかどうかで学習意欲も随分違ってくるので、そういう環境を大事にしていきたいと思う。今までは学習とは、知識や技を身につけることだと言っていたが、ある職業なり、文化のコミュニティに参加していくことが学習だという議論がある。子どもたちも、子ども同士の学びの関係の中に入っていき、成長になるということがあると思うので、学力の3つの要素を促進する学校の環境を作っていきたいと思う。

【会長】

どうもありがとうございました。そろそろ予定の時間になりましたので、本日の協議はこれで終わらせていただきたいと思います。

「生きる力」とか「学力」という問題は、今後の三重県の教育のあり方や、次のステージにおいて、非常に重要な点だと思いますので、今日出されました意見を確実に引き継いでいただけるようによろしくお願ひしたいと思います。

4 その他

連絡事項

今回は、学校経営改善部会の報告を含め、1月下旬を目処に開きたいと思っている。この部会では、今の学校が抱えている課題、信頼される学校づくりにむけてどうして行くか、子どもたちが生き生きとした学校づくりを目指してどう取り組むか等、幅広い観点から議論いただき、評価についてまとめている。今回「生きる力」なり「確かな学力」で出された皆様の意見が、次回の会議にも活かさせていけると思っている。

なお、「確かな学力」に関して論点整理をさせていただき、会長さんと相談の上、次回もう少し議論を掘り下げたところまで持って行ければと考えているので、よろしくお願ひいたします。それではこれをもちまして第5回の会議を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

以上